



近江の古鏡Ⅲ


今回は湖南地方のうち田野洲郡出土の古鏡について説明しましょう。野洲町は栗東町と共に古鏡の出土がたいへん多い地域です。湖南の神無備の山として古代から信仰の中心であったと思われる三上山の山麓からその周辺には多くの古墳があり、その中には7面の三角縁神獸鏡や、韓国公州にある百濟国王武寧王陵出土の鏡と同型と思われる2面の獸帯鏡など、注目すべき鏡があります。

現在わかっている鏡のうち発見年月の最も古いものは、野洲町小篠原の天王山と言われている古墳で発見された三角縁三神三獸鏡と画像鏡の2面で、共に仿製鏡です。これは明治7年頃山遊びの少年達によって偶然発見されたもので、後に京都市の知恩院の所蔵となり、現在は京都国立博物館に保管されています。伴出遺物としては玉類や鍬などがあったようです。画像鏡の鏡面に他の鏡の跡があって、これが三角縁神獸鏡とぴったり一致するため、2面が鏡面を合わせて埋納されていたことがわかります。写真で画像鏡鏡面の痕跡を示しておきました。三角縁三神三獸鏡は、その直径が21.8cmの鏡で、内区は6個の乳で6分割された区画内に神像と獸像が交互に描かれており、それをとりまいて10個の乳で分割された獸文帯があります(1)。この鏡の同範鏡としては、佐賀県浜玉町谷口古墳出土鏡2面、大阪府高槻市焼山古墳出土鏡、愛知県小牧市小木天王山古墳出土鏡及び個人蔵鏡1面があります。画像鏡は三角縁神獸鏡よりさらに大きく、直径が26.5cmの鏡です。内区の文様は6個の乳で分けられた6区画のうちの相対する2区画内に、一は両脇に侍者を従え

た神仙像が、他は一方に侍者を従えた神仙像があり、その他の4区画には獸像が描かれています。円圏で囲まれた四葉鈕座の間にも各1体の人物像が見られます(2)。

次に明治29年に野洲町富波の古高波山古墳で3面の三角縁神獸鏡が発見されました。ここは山麓からやや離れた平地で、本殿が重要文化財となっている生和神社に近いところですが、現在ではすっかり開発されて往年の田畠の中の面影は全然ありません。墳丘は完全に削平され、住宅地の中の小公園として僅かにその位置を教えてくれるだけです。この辺りには多くの古墳があったらしく、付近には早く削平されて田畠と化し、その伝承すら無くなってしまった古墳の基底部分が、宅地の造成に伴う事前調査で発見されたものもあり、亀塚とよばれる古墳が辛ろうじて残っています。出土した3面の鏡は、1面が東京国立博物館に、1面がベルリン民俗博物館に渡っており、1面だけが地元に残って現在は滋賀県立琵琶湖文化館に預けられています。東京国立博物館所蔵のものは、直径が21.8cmの三角縁二神二獸鏡です。内区は4個の乳で分割されたそれぞれの区画に相対する形で神像と獸像が配されています。その神像の区画を見ますと、主神を挟んで一方に主神よりやや小さく主神の方に向いた侍神を描き、反対側に笠松形を描いた区画と、2神を並列させているようですが、これも1神の姿は他に侍するような姿に描かれていて、反対側の乳の傍らに獸面のある区画があります。また1獸の尾端には「虎」と書かれています。したがって、従来の鏡名である侍者をも1神と見る四神二

獣鏡の鏡名をとらず、侍者を伴った2神と竜虎を示す2獣を描いたと見る二神二獣鏡の鏡名をとることにします。内区をとりまいた銘帯には「東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（近畿1）」によれば

陳氏作竟甚大好 上有越守□□ 身有文章口銜巨 古有聖人王父母 渴飲玉泉食棗の銘文が時計廻りに書かれています。普通は「食」の前に「飢」があるのですが、これは一字を入れる空白部分があるだけです(3)。この鏡と同範の鏡に、銘帯のうちの「銜巨古有」の部分だけが辛ろうじて残った京都府山城町椿井大塚山古墳出土鏡の小破片があります。ベルリン民俗博物館所蔵のものは三角縁四神四獣鏡で、その径は21.9cmです。4乳で分割された各区画に神像と獣像を並列したものを描き、相對する一対は神像と獣像の間に笠松形を置いています。これも銘文があり、

王氏作竟甚大明 同出徐州刻鏤成 師子辟邪□□□ □□□□坐中□ 取者大吉樂未央

と読まれています。写真は梅原末治氏の「欧米蒐儲支那古銅精華 鏡鑑部二」に収載されているもので、この小文はこれを参考しています(4)。これと同範のものに福岡市老司古墳出土鏡とアメリカのフリア美術館所蔵鏡があります。地元の個人蔵のものは三角縁三神五獣鏡で、その直径が22cmの鏡です。この鏡の内区は4乳で分割した各区画内に、2神を並列するもの、1神1獣を描くもの、2獣を並列するもの2区画の4区画となっています。それをとりまく銘帯の部分は破損がひどく、大部が欠落していますが、

□□□□王喬以赤□□□□天□名□
□□□□吾□竟寿□太山

と読めます。これを同範鏡の銘文などを参考として欠字を補ってみますと

吾作明竟甚大工 上有王喬以赤松 師子天鹿其隣龍 天下名好世無雙 昭吾□竟寿如太山

となるだろうとの論考があります(5)。なお「滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要」などにある銘文の解読は、前述の如き欠落の多い銘帯だけで何とか考えようとした無理なものだと思われまので、取るべきではありません。この鏡の同範鏡としては兵庫県洲本市コヤダニ古墳出土鏡、静岡県小笠町上平川大塚山古墳出土鏡、それに京都府山城町椿井大塚山古墳出土と伝えられるものがあります。

明治31年には中主町木部の錦織寺に近い中里古墳で仿製の七獣鏡が発見されました。直径が10.6cmの鏡で、銹化のため文様は模糊としています。伴出の遺物として玉類や銅鈴、武器馬具の破片等が伝えられ、須恵器も出土しているようです(6)。現在は東京国立博物館の所蔵となっています。

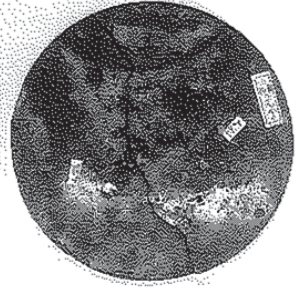
同じ明治31年に三上山下で薄肉刻獣帯鏡2面が発見されました。ただしこの2面の出土状況や伴出遺物は一切不明です。これは山川氏というコレクターの手許にあったもので、この山川氏のコレクションが梅原末治氏によって調査され「梅仙居藏古鏡図集」として公刊されました。また、2面の内の1面の鏡の表面に魚佩の跡があることで注目されました。この魚佩については、最近の奈良県斑鳩の藤ノ木古墳の出土品の出土状況からその用途が明らかとなりました。藤ノ木古墳では、この魚形が刀剣の傍から出土しており、また、このような魚形が刀剣に付属する実例もあって、従来言われていた腰佩ではなく、刀剣に付属するものであることが明らかとなったのです。この2面は、韓国公州の百済国王武寧王の陵墓から出土した鏡や、群馬県高崎市観音山古墳出土鏡と同型の踏返し鏡としても有名です。大きさは直径が23cmのものと22.4cm（原文では7寸6分、7寸4分）で、大きさに少差があるのは鑄造の際に生じたものです。鈕座をめぐって9乳があり、ここに「宜子孫」の銘があります。この小乳帯をとりまいて、有節の重弧文帯を挟んだ2条の素圏がめぐって



1



2



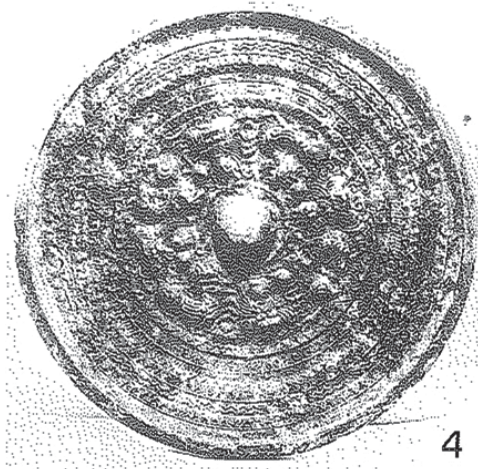
天王山古墳出土
画像鏡面の他鏡痕跡

1. 2.
天山王古墳

3. 4. 5.
古富波古墳



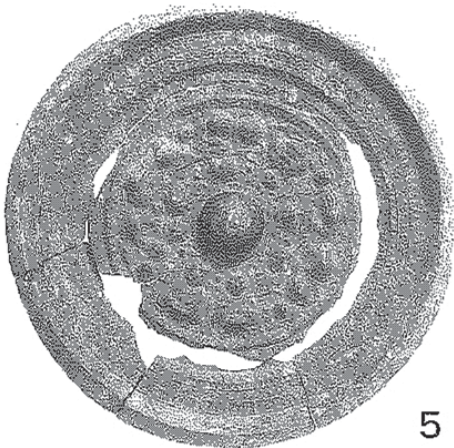
3



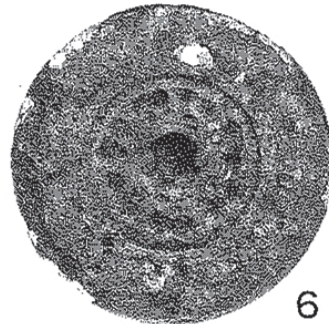
4

6.
中里古墳

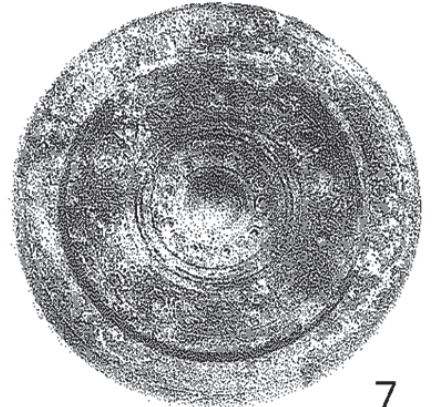
7. 8.
三上山下



5



6



7

1~3. 5. 6. 9~15.

寿福 滋氏写真

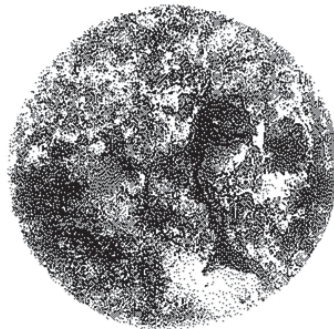
4. 欧米菟儲支那古銅精華より

7. 8. 魚佩痕跡

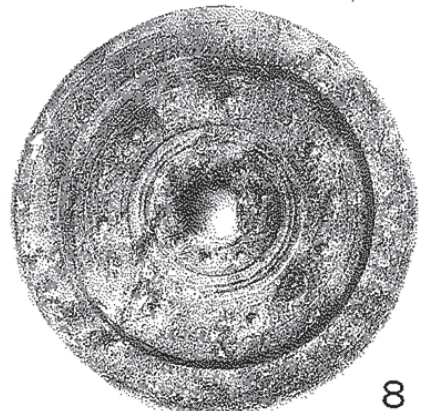
梅仙居蔵古鏡図集より

画像鏡面痕跡 16~18.

西田写真



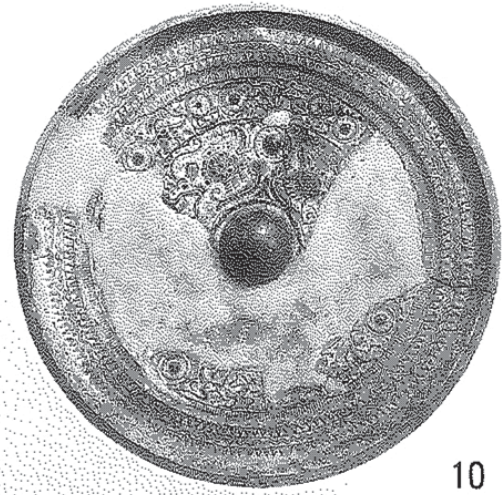
三上山下出土鏡の
魚佩痕跡



8



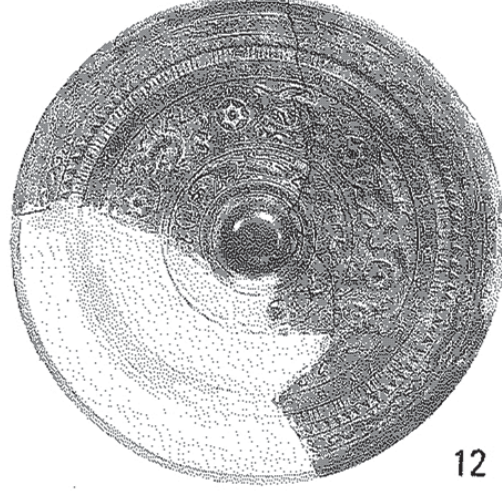
9



10



11



12



13



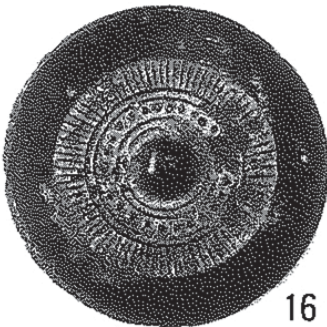
14

15. 服部遺跡



15

13. 14. 野洲町内



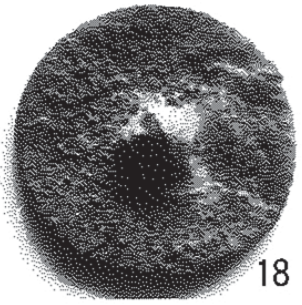
16

16. 金森遺跡

17. 18. 下長遺跡



17



18

ます。その外側の主文帯は四葉座をつけた7個の乳によって等分割され、そこに薄肉刻の図像があります。その外側に細い銘帯がありますが、これは同型鏡である高崎市観音山古墳出土鏡で見ると

……………飲玉泉飢食棗……………兮

が読めるようです(7、8)。なお、同じ山川氏の旧コレクションの中に、三上山麓から出土したと伝えられる径20.6cmの舶載の内行花文鏡があったようですが、これについては現物も写真や図面も無く、これ以上のことはわかりません。これらの山川氏のコレクションは現在他の人の手に渡っており、このようなコレクションの性質上、筆者にはその後の行方については追求する手段がありません。ここでは資料によってわかり得ることだけを述べておきます。

大正10年には野洲町小篠原大岩山の一古墳で4面の大型鏡と1面の仿製鏡が発見されました。大型鏡の4面は現在東京国立博物館にありますが、仿製鏡の1面は記録があるだけで、現物は所在不明です。4面の大型鏡の1面は三角縁二神二獣車馬鏡で、大きさは直径が25.8cmの鏡です。内区は6個の乳で分割された各区画内に神仙像2、獣像2、車、馬各1を描いています。銘帯の各文字の間には小乳を置いており、銘文は時計廻りに

鏡陳氏作甚大工 刻模周□用青同 君宜高
官至海東 保子宜孫

とあります。「東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(近畿1)」では、この銘文の最初の「鏡」を最後として「孫」の次に「鏡」を書いています。銘文の通例では「陳氏作鏡」となるのですが、これは鑄造の際「鏡」の位置を誤ったのではないかとの意見もあり、多くは前述の如く「鏡陳氏作……………」と読んでいるようです。この銘文にある「至海東=海東に至る」については、他の鏡の銘文中にも別の言葉と結ばれて存在するものがあります。総説の中で述べたように、三角縁神獸鏡は呉

の工人が倭へ来て作ったのだという学説の一つの傍証としてこの銘文が取りあげられています。しかし、果してこれが正しいかどうかは疑問とすべきでしょう。即ち、鏡銘中には中国の神仙思想に関するものが多く見られます。例えば前述の「王喬」や「赤松」は神仙思想の中に出てくる人名であり、「渴しては玉泉を飲み、飢えては棗を食す」などもその一例です。この海東も所謂不老長寿の国が東海中にあるという古代中国の思想の一端を示すものだという説もあり、むしろこの方が銘文のあり方からすると妥当なのではないでしょうか。呉の工人がわが国へ来たとする説では、それは決して喜んで渡来した状態ではないようですから、そのような状況の中での渡来の事実を、目出度い文章の多い銘文の中に入れるのでしょうか。どうもしっくりしないものがあります。この鏡の同範鏡は発見されておりません(9)。二は三角縁龍虎鏡で、直径24.5cmの鏡です。この鏡は、鈕と外区の大部分は残っていますが、内区は大きく欠失しています。したがってその主文様は不明の部分が多いのですが、同範鏡が多く、これによってその大要を知ることができます。同範鏡には岡山市湯迫車塚古墳出土鏡、群馬県富岡市北山茶白山古墳出土鏡、奈良市富雄丸山1号墳出土と伝えられるもの、出土古墳名は不明ですが奈良県内出土と伝えられるものがあります。この同範鏡の文様から推測しますと、内区は4個の乳によって分割された各区画内に、1角を持った3匹の竜と1匹の獣が描かれています。従来この鏡は盤竜鏡とよばれていましたが、東京国立博物館では龍虎鏡としており、この小文でも龍虎鏡とします。内区外周には、8個の乳で区画されたそれぞれに車馬、騎馬、車輪、獣首その他を描いた画像文帯がめぐっています(10)。三は三角縁二神四獣鏡と思われます。内区は4個の乳で分割されていますが、その内の1区画は完全に欠失し、それに相對する部分も一部が欠けてい

るので正確には言えないのですが、おそらくここには神像と獣像が並列しており、獣像のみの2区画と合わせて二神四獣であると思われます。これの同範鏡としては大阪府池田市横山古墳出土鏡と出土地不明鏡がありますが、この出土地不明鏡からこの鏡の欠けた部分を推測することができるのです。この内区の外側を獣文帯がとりまいています。これも半分ほどが欠失していますが、同範鏡から推測して、この獣文帯を4分割したところに方格を置き、この方格の中に「天・王・日・月」の銘を一字ずつ入れているようです。この鏡の直径は21.4cmです(11)。四は獣帯鏡で、約4分の1強が欠失しています。直径は23cmです。内行花文座の6乳で6分割された内区の各区画内には四神その他が描かれ(朱雀の部分が欠けているようです)、鈕をめぐって盤竜文と五銖銭文があります。銘文は初めの部分が欠失していますが、残りの部分は

工元之成文章 白虎辟明居中央
寿金如石佳自好 上有山人不老兮

とあります(12)。なお、東京国立博物館の図版目録によりますと、4面の鏡面にはすべて布痕が付着しているようです。これらの鏡の報告には、4面のほかに直径約14cmの仿製鏡が1面あったようですが、平縁であることのほかは全然具体的な説明がありません。

上に述べた野洲町内の天王山、古富波山、大岩山の各古墳は大岩山古墳群の中の古墳として国の史跡に指定されています。

以上のほか野洲町内出土と伝えられている鏡が2面あります。一は個人の所蔵品で、現在滋賀県立琵琶湖文化館が預っている仿製の乳文鏡で、直径11.2cmの鏡です。出土の場所や日時等その詳細は不明です(13)。もう一つの鏡は中主町の兵主大社所蔵の鏡で、これは大正年間か昭和の初年の頃に発見されたようですが、その発見に関する詳細をはじめ、何故兵主大社にあるのかも不明です。内区の一部が欠けていますが、4個の乳を巻くように

した獣形と、極めて簡略化された神像が交互に描かれた四神四獣鏡です。直径は15.3cm、仿製鏡です(14)。

守山市では4面の小型仿製鏡が古墳以外の場所で発見されました。一は服部遺跡で出土した直径7.8cmの仿製内行花文鏡です。昭和51年、野洲川南北両流を一本化するための野洲川改修工事に伴う服部遺跡の発掘調査中に発見されました。服部遺跡は弥生時代から歴史時代にかけての複合遺跡として有名な遺跡で、この鏡の出土場所は古墳時代の溝の中ですから、この鏡を古墳時代の鏡として誤りはないと思われます。内行花文は7個で二重の線で描かれています(15)。二は^{かながしり}金森で耕作中に発見されたものらしく、直径5.4cmの仿製珠文鏡です。鈕をめぐって二重の圏線があり、一重の珠文列がめぐる主文様帯をさらに二重の圏線が囲み、比較的幅の広い櫛歯文帯がこれにつづいています(16)。この鏡は採集品ですから出土遺構などはわかりません。三は同市古高町の^{しもなが}下長遺跡出土の小型の仿製鏡2面です。これは昭和58年の守山市教育委員会の調査の際発見されました。共に素文鏡のようです。大きい方は直径が3.7cmで、古墳時代の土壌から出土しました(17)。小さい方は直径が2.6cmで、やはり古墳時代の溝から出土しました(18)。したがってこの2面は古墳時代のものであることは確実です。なお、下長遺跡のある古高町のあたりには、松塚や幸田塚などの古墳があり、ごく最近にもこの小型鏡出土地の近くで石釧などが出土しており、この下長遺跡は古墳時代の古墳に関連する遺構の存在も考えられる場所のようです。

湖南の出土鏡について2回にわたってその概要を述べました。先年近江の古鏡について「文化財だより」に述べたことがありますが、その後の調査の結果一部説明を変更したものもあることをお断りしておきます。

(西田 弘氏 提供)